

東京経済大学報

2012年度 第45巻 第2号

十一
×
÷
TOKYO
TOP30
計画

四つを、守る。

創立者・大倉喜八郎は、111年前、学生たちに、
社会で活躍するために守るべき四つのことを語っています。

(大倉商業学校演説集 明治35年)

- 第一に 正直でなければならぬということである。
- 第二には 進取の観念というのを頭脳に注入することが最も必要だ。
- 第三には 義務を果たす根性が強くなければならぬ。
- 第四は 辛抱すなわち忍耐ということである。

進取の観念をもって、T O K Y O T O P 3 0 計画。

知の拠点として

日本語の総合的な運用能力を測る「日本語検定」。採用にあたって、検定認定者を評価する企業も多いこの検定試験において、東京経済大学は2012年度、団体優秀賞を受賞した。主に1年生を対象にした「文章表現基礎」を担当し、本学学生の日本語運用能力の向上に取り組む上野麻美准教授に、「現代の若者と日本語」についてインタビューした。

現代若者 「日本語」 事情

大学が手を掛けて
書く力を鍛えることで、
就業力、そして
現代社会を生き抜く力を育む

正しい
日本語ですか？



「行けわる」

「えさ入る」

正しい日本語に
こだわる場を与える

日本語検定合格を一つの目標にしている「文章表現基礎」は、私を含めて6名の教員が担当し、17クラスを開講しています。選択科目ですが非常に人気が高く、定員を大きく上回る希望者が集まります。

この科目が人気を集める理由に、学生の「自分の日本語に対する不安」があると思います。授業では、最初に自己紹介文を書きますが、「文章を書くのが苦手」「この授業を通して自分の日本語力を高めたい」と書く学生がとて多いです。正確な日本語表現が苦手だという自覚があるということは、それだけ言葉による表現に関心がある学生が本学には多いと言えるかもしれません。

日本語検定には語彙や漢字、敬語などの6つの出題分野があります。中でも、敬語や文法は短期間でもしっかり学ぶことで、日本語検定の点数が飛躍的に伸びる分野です。授業を受ける前と後とで、学生に変化が一番あるのは、敬語、文法なのです。

最近若者の言葉の乱れがよく話題になります。それは、「正しい日本語」「美しい日本語」に接する機会が非常に少ない環境にいまの若者たちは生

上野 麻美 東京経済大学経済学部 准教授

うえの あさみ◎東担当科目は「日本文学Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」「文章表現基礎」
専門は日本文学、説話文学、仏教文学。

きているからだとは考えます。いまどきの中高生は、学校の先生に対しても「タメ口」が珍しくないと思います。せいぜい、「です」「ます」で結ぶくらいです。これでは、敬語はなかなか身につけません。

またテレビでは、いわゆる「ら抜き言葉」「れ不足言葉」が横行しています。さらに、いまの学生は、本を読むといってもライトノベルズやケータイ小説など、話し言葉に近い文章で書いてあるものばかりです。インターネットが発達し、なんでも「検索」できる時代、自分の興味を満たすた

めに時間をかけて一冊の本を読む必要性も少なくなっています。学生のみならず現代人の日常に、じっくりと書物に向き合う時間、知的なゆとりがなくなっていることも感じます。

こうした社会に生きているからこそ、文章表現基礎の授業で、正しい日本語を指導することは、学生の成長にとって重要だと思えます。授業で学んだ敬語を使って、目上の人にあてた手紙文を書く練習をしますが、こうした経験は就職活動にも生かせるでしょうし、実際に仕事をしていくうえでも役立つはずで、過去に文章表現基礎を

検定問題に 挑戦!

日本語検定には、小学校低学年から社会人までを対象に、1〜7級の試験があります。ここでは、高校生・大学生・社会人を主な対象とする3級(中級I)の問題をご紹介します。

※各問の正解は、10ページ下に記載しています。

問題/敬語

【1】のような場面で、それぞれの() 部分はどのような言い方をすればよいでしょうか。最も適切なものを選んで、①〜③の番号で答えてください。

問一 【取引先に、打ち合わせを要望する】

よろしければ来週中に()。

- ① お目にかかれませんかでしょうか
- ② お目にかかっていただけませんかでしょうか
- ③ お会いしてくださいませんかでしょうか

問二 【医者が、患者に指示する】

あせらずご自分のペースでリハビリを()。

- ① いたしてください
- ② されてください
- ③ なさられてください

問題/文法

次のようなことを言うとき、——部分の言い方は適切でしょうか。適切である場合には○、適切でない場合には×で答えてください。

問一 旅行代金の計算には、空港使用料も含ませていただきました。

問二 ふだん料理をしない彼に、釣った魚をさばかせたのは、間違いだった。

問三 三浦くんに交渉を任せれば、相手方をちゃんと説得してこられるだろう。

ますが、書き直しは宿題です。合格印が押されない限り、何度でも家で書き直さなければなりません。これまでに最多は7回の書き直しでした。

書き直しは教師にとっても学生にとっても大変です。しかし、書き直す過程でこそ、文章を書く力が身につけていきます。添削されて赤だらけになった文章をただ眺めて「なるほど、そうか」と理解するだけでは、書く力は身につけません。教える側が手を掛けて、学生自身に自分の文章がどう変わっていったのかを把握させることが大切です。だから、授業では、赤が入った原稿の上に書

き直した原稿を重ねていき、ホチキスでとめさせています。

課題を積み重ねていく中で、学生が書き直す回数には確実に減り、添削にかかる教師の手間もだんだん減っていきます。1回で合格する学生も出てきます。こちらが手をかければ、学生の書く力は確実に高まっています。

社会全体の伝える力が 低下している

文章を書くことに対する苦手意識を克服させよ

履修した学生が、就職活動を行う中で、「あの授業で学んだことが役立っていると実感しています」と私に話をしてくれることは珍しくありません。

手を掛ければ 書く力は高まっていく

文章表現基礎では、文章を書く指導も行います。日本語検定試験の勉強を通して日本語の運用能力を身につけたら、その能力を使って、自分の意見を論理的に表明する文章を書けるようになる、というわけです。

いきなり長い文章は書くのは大変ですから、最初は600字の小論文から始めます。最初のうちは、学生が書く小論文は説明不足で、ひとりよがりなものが目立ちます。書いている本人にはわかるのだから、第三者が読むと何が言いたいのかわからないという文章です。また、意見を述べるに当たってはその根拠を示すように指導しますが、根拠のつもりで示したものが実は根拠になっていないこともよくあります。

そこで私は「主語が抜けているから誰の行動かわからない」「そう考える根拠がどこにも書かれていない」というように、学生の書いた文章を細かく添削します。甘い目で見れば「きつこということを言いたいのだろう」と察することはできるのですが、あえて意地悪に指摘するわけです。赤ペンでたくさん修正指示や疑問を書き込んで、同じ文章を合格するまで何回も書き直させます。最初に書くときは授業時間内に書くように指導し

うと、いま、どの大学でもレポートをたくさん課しています。レポートを課すことは確かに大切なことですが、たくさん書けばそれだけでうまくなるとは限りません。学生がいつまでもうまく書けないままなら、教師は「最近の学生にはやはり文章力が低い」と嘆くほかありません。

学生も、自分の文章がよくないことはわかっているけれど、よくするためにはどうしたらよいかかわからず、文章を書くことにさらに苦手意識を持って卒業してしまふ……。そんな悪循環を早期に断ち切るためにも、どう書いたらよいかを学生が丁寧に教わり、正しい書き方の練習を積み重ねて大学が意図的に設ける必要が、いま日本の大学にはあるのだと思います。

学生の書く力の低下には、社会的な背景があると私は考えています。普段から友だち同士で「私はこう考える。なぜなら……」と意見を交わしている、意見と根拠をセットで述べる習慣が自然と身につくでしょう。

しかし、いまの学生は友だちとの間で議論することが減っているとされています。世の中のことに対して意見を持っていないわけではないけれど、友だちと熱く意見をぶつけ合う機会が少ないようです。いま、私たちの社会は原発の問題など、じっくりと腰を据えて話し合うべき課題を多く抱えています。こうした時代だからこそ、私たちは意見とともに根拠を述べることができる若者を育てなければいけないと思います。

最近では学生に限らず、根拠を述べずに意見だけを通そうとする人が多いように感じます。強い言



知の拠点として

業で押し通そうとして、それがかなわなければ激昂し、最後には「どうせあいつにはわからない」と断絶する。近頃の社会はどうもぎすぎすしている人多くの人が感じていると思いますが、伝える力の低下と社会のありようが大きく関係しているように思えてなりません。

大人たちの中には「勉強しない学生がダメなのだ」と、問題を学生個人の問題にしてしまう人もいます。しかしいまの学生は、普通に生活している限り、そういうふうになってしまっているのではないのでしょうか。東日本大震災以降の学生たちの行動を見ても、学生たちには社会貢献の意識はあり、



また、もつと世の中をよくしたいという気持ちを持っていてと思います。しかし、意見はあるけれど、それを伝えるための方法を知らない、そういうかわいそうな状況なのだと思うのです。

書く力が学生の学びを豊かにする

1年次に論理的な文章を書く訓練を積むことで、就職後に必要な社会人基礎力が身につくだけでなく、2年次以降の大学の学びも豊かになります。

実際、授業を受ける中で、長い文章を書くことに対する抵抗が学生たちからなくなってきました。長い文章が書けることを実感できるようになると、学生に自信が生まれます。ほかの授業で課されるレポートにも自信を持って臨めるはずですよ。

何も指示しないで自由に文章を書かせると、段落を分けなくて延々と書く学生も少なくありません。そういう学生の文章は、ただ思いついたことをそのまま書き連ねてあることが多く、その学生の思考の中に「段落」が必要ないのかもしれない。

しかし、授業を通して段落というものの存在を強く意識するようになると、どういう順序で考えを述べると相手に伝わりやすいかがわかるようになります。頭の中でも、序論、本論、結論といったように論理を展開できるようになります。

学生は、本学での4年間で授業やサークルなどでさまざまな体験をし、多くを学ぶはずですよ。就職試験では面接や論文を通してそれを他者に伝える

ることになります。ですが、せっかくよい経験をし、素晴らしい気づきを得たのに、それを相手にうまく伝えられないとしたら本当にもったいないことです。

私は、グローバル化が進むこれからの社会においても、日本語の文章をしっかりと書ける力は重要になってくると思います。「国語力のある人は英語力も高い」ということは、本学の英語の先生とお話ししても意見が一致します。日本語の文章をしっかりと書けるということは、自分の考えたことを言葉で説明する訓練ができてくるからであり、それが使う言語が日本語から英語になるだけの話だからです。

数学者の藤原正彦氏が著書『祖国とは国語』（新潮社）の中で「英語が話せる日本人は確かに増えたが、内容のない浅薄な会話をただ英語でするようになっただけではないか」といったことを述べています。流暢な英語だけれど、内容の浅いことを話されるよりも、たとえ拙い英語であっても、考え抜いたしっかりとらした意見を述べる人の話に耳を傾けたい……どんな国の人であっても、知的な人ほどきつとそう考えるはずですよ。

しっかりと考え抜いた意見を、相手にわかるような言葉で伝えられる力を学生に養うことで、グローバル社会を生きるための自分のよりどころ、思考の根幹を育てたいと願っています。